

「台湾における台湾史と中華民国史のあいだ」
川島真 (東京大学)

0. 国家史と中国史

国民国家と国史 (ナショナル・ヒストリー)、中国史の形成。[史料1]
清史から中国史へ。清末における「国史」形成。[史料2]
中華民国期に引き継がれる「中国史」(『清史稿』の編纂も継続)
→ 侵略/抵抗、主権、領土、国権喪失過程(国権回収)、正当性強調

1. 戦後の二つの中国史

- ・ 中華民国と中華人民共和国による「中国史」
- ・ 主張する領域、正当性、さらに階級闘争などによる違い

2. 台湾における「中国史」

- ・ 日本統治時代、台湾は「帝国の一部」
- ・ 中華民国もまた台湾を「地方」と扱う。

3. 中国における中華民国史の隆盛

- ・ 1980年代からの統一戦線の一部
- ・ 改革開放政策に対応
- ・ 合同抗日戦線という側面も

4. 台湾化と民主化の進展—台湾史の時代—

- ・ 1980年代後半に一党独裁停止。民主化に舵を切る。
1990年代初頭に大陸反攻も停止。
- ・ 経済発展にともなう中産階級の成長、民主化。
社会の8割以上を占める台湾人が主人公となる「台湾史」の隆盛。
- ・ 『認識台湾』(李登輝政権下)

5. 引き裂かれる中華民国史と台湾史

- ・ 陳水扁政権下における台湾史と中華民国史の切り離し
- ・ 学界における中国史と台湾史の分断
- ・ 教科書綱要改訂問題
- ・ 中華人民共和国の中国史、中華民国の中国史、台湾の台湾史それぞれの境界

[史料1]

梁啓超「中国史叙論」¹。

吾人がもっとも漸愧にたえないのは、わが国には国名がないということである…漢人、唐人などは王朝名にすぎないし、外国人のいう支那などは、われわれが自ら名づけた名ではない…王朝名でわが歴史を呼ぶのは国民を重んずるという趣旨に反する。支那などの名でわが歴史を呼ぶのは、名は主人に従うという公理に反する…中国・中華などの名には確かに自尊自大の気味があり、他国の批判を招くかもしれないが、三者（王朝名、外国からの呼び名、中国・中華）それぞれに欠点があるなかでは、やはり吾人の口頭の習慣に従って『中国史』と呼ぶことを選びたい。

[史料2] 光緒三十一年（1905年）『小学校用 国文教科書』（商務印書館発行）

第九課 外交失敗 わが国は古より閉関自主であり、周囲を見れば皆小国と看做し、その文化もまた自らに及ばないと考えていた。だからこそ自らを中国と号したのである。当初は地球の大きさを知らなかったのである。道光年間以来、各国と条約を締結して通商をおこない、外国人が相次いでやってきた。わが国は外国の事情に疎く、自強を図らなかったので、外交は失敗することが続くことになったのである。（後略）

第十一課 続。（前略）嗚呼、アヘン戦争以来、六十年もの間、領地を割譲させられること八回、属国を失うこと三回、戦費賠償を支払うこと七億、どうして心いたまわずにいられようか。

アヘン戦争 道光十九年から道光二十二年。香港を割譲。二千百両の賠償金。

英仏聯合軍（アロー戦争） 咸豊七年から十年。九龍を割譲。八百万両の賠償金。

安南の役（清仏戦争） 光緒八年から光緒十一年。

中日の役（日清戦争） 光緒二十年から光緒二十一年。台湾を割譲。二億三千万両の賠償金。

八国聯軍の役（義和団事件）光緒二十六年から二十七年。四億五千万両の賠償金²。

¹梁啓超「中国史叙論」（『清議報』第90冊・91冊、1901年9月3日・13日、『飲氷室合集』第一冊文集、61-62頁）。

²『訂正 最新国文教科書』〈第十一冊〉（上海商務印書館出版、光緒三十一年初版、三十二年七月五版、8-11頁）